

オピニオン

学校図書館リニューアール

NPO法人学校図書館総合研究所長

木幡 洋子



49年広島市佐伯区生まれ。広島大学院社会科学研究科博士課程単位取得退学。青森県立保健大准教授などを経て03年から14年まで愛知県立大教授。専攻は憲法学、教育法学。22年から現職。名古屋市在住。

中国新聞デジタルで報じられている広島県立学校の図書館リニューアール事業を巡る問題を読んで驚いた。児童文学評論家の赤木かん子氏が関わった15校で、現場の声を聞くことなく図書廃棄と購入を行っていたという。

さらに驚くのは、高校が購入を求められたという赤木氏の著作リストである。Lレブックの絵本と紙芝居がなぜか20冊以上も並んでいる。

Lレブックというのは、スウェーデン語「Läst」(読みやすい)の略語で、障害のある人も読書を楽しむことができるように作られているものだ。日本での出版点数は少なく、単価も高い。同じ内容の絵本と比べ、費用が数倍かかる。

Lレブックについては、私たちの研究所も普及に力を入れている。全ての人が読書を楽しむことができる「読書ハリアフリー」の視点からである。公共図書館や特別支援学校などに配架されることで、

要は人材育成 外注にあらず

誰もが読書を楽しむことができるようになるのは素晴らしいことだ。

ただ、今回のリニューアール事業ではLレブックの絵本と紙芝居を、それも赤木氏の著作を高校が購入している。赤木氏をアドバイザーとすることが事業参加の条件だったため、学校側は彼女と契約をし、その指示のままに本人の著作を買ったのだろう。

「Lレブックとは何か」を高校生たちが理解するのはよいことだと思う。ただ、そのためであれば、公共図書館にある本を団体貸し出しで借りれば済む。学校図書館の使命は本来、その学校の教育内容に資する図書資料の充実を計ることなのである。

学校司書がいれば、そうした判断から全体の資料構成をみて、20冊以上も購入することはないはずだ。

今回は、リニューアール事業の名目で付けられた、通常とは異なる予算で購入したらしい。不思議なのは「赤木リスト」の中身に対し、県教委としてチェックした形跡がみら

れないことである。高校で20冊以上のLレブックが必要だと、県教委はなぜ判断したのだろう。

赤木氏をアドバイザーとした経緯についても疑問は残る。彼女は、絵入りの「かん子分類シール」を用いること、不要な本を廃棄することを学校図書館改革の手法としている。小学校低学年くらいなら、絵による分類も意味がある。

しかし、高学年や中学校はもとより高校では、きちんとした分類目録の知識を得て、生涯の財産となる図書館利用教育を受けることが重要である。廃棄の判断を1人で行っている点も問題だ。

ぬいぐるみを図書館に置くという手法自体は、悪いものではない。問題は、費用の出どころと購入における優先順位付け方だろう。

十分な予算の捻出が困難な財政のため、県は学校図書館リニューアールのための寄付金を募っている。浄財をきちんと使うために、ぬいぐるみは必要だろうか。それなら例えば、地域で持ち寄り合う方が住民意識の喚起にもなるのではないか。

赤木氏の契約相手は、各学

校である。「赤木氏をアドバイザーとすること」との県教委の指示に従い、結んだ契約にはかならない。

学校現場の意見や事情を配慮すべきであるという、県教委作成の「学校図書館リニューアールの手引」とは真逆の、上意下達のような契約がなぜ結ばれたのだろう。

文部科学省の「学校図書館の現状に関する調査」から、広島県の苦しい内情がうかがえる。県立高校の学校司書配置は16年で2・2%と全国最下位。直近の調査で6・5%と最下位こそ逃れたものの、下から3番目である。

学校図書館のことが分かる人材がいらないから、外部に発注する。それは、学校図書館の要が「人」だということを忘れた施策であり、学校図書館の発展には決してつながらない。図書の廃棄についても、教員や県内の小中学校に相当数いる学校司書を活用し、合議で判断することもできたはずである。

たとえ回り道に見えても、学校司書を育成することが先なのではないだろうか。

